

## 塾員山脈

公認会計士  
有限責任監査法人トーマツ  
経営会議メンバー 金融インダストリー担当  
デロイトトウシュートーマツ リミテッド  
ボードメンバー

### 後藤 順子 君

【どう よりこ】

1958年東京生まれ。慶應義塾女子高等学校を経て1981年に大学経済学部を卒業。83年公認会計士試験に合格し、デロイト・ハスキングズ・アンド・セルズ公認会計士共同事務所に就職。90年サンワ・等松青木監査法人との合併により監査法人トーマツが発足、同法人で主に銀行など金融分野を担当。ニューヨーク勤務を経て、現在は有限責任監査法人トーマツ 経営会議メンバー 金融インダストリー担当を務める他、デロイトトウシュートーマツリミテッドのボードメンバーでもある。2013年3月、公認会計士三田会の会長に就任。



## 世界的な会計事務所であるデロイトの ボードメンバーとして活躍する公認会計士 昨春から、公認会計士三田会初の女性会長

英語が苦手なのに、外資系会計事務所に就職。夜間スクールで猛勉強

——公認会計士の後藤順子さんは、有限責任監査法人トーマツの紅一点の経営会議メンバーであるとともに、トーマツがその一角を担う世界的な会計事務所グループであるデロイトトウシュートーマツリミテッド（以下デロイト）のボードメンバーの一人です。トーマツは日本を代表する会計事務所として一般の人にも広く知られていますが、デロイトというと耳になじみのない人もいます。簡単にその関係を教えてください。

**後藤** デロイトは、世界4大会計事務所の一つです。デロイトおよびそのネットワークは世界150カ国、約20万人のプロフェッショナルによって構成されています。

私は、現在のデロイトの前身であるデロイト・ハスキングズ・アンド・セルズの日本メンバーファームで1983年に働き始めました。1990年にデロイト・ハスキングズ・アンド・セルズがトウシュ・ロスと合併し、デロイト・ロストーマツインターナショナル（現・デロイトトウシュートーマツリミテッド）となったことに伴い、各々の日本のメンバーファ

ームも合併して「監査法人トーマツ」(現・有限責任監査法人トーマツ)ができ、私はそちらの所属になりました。

——外資系の事務所に就職した理由は、英語が得意だからですか？

**後藤** とんでもない(笑)。正直なところ、その頃の私は英語がまったく苦手。ですから、まずは日本の会計事務所の就職試験を受けました。ところが面接で「結婚はどうするんだ。女の幸せは結婚と子育てだろう」と言われて、その古臭さにびっくりするとともにあきれました。もともと、今の塾生には想像もつかないでしょうが、男女雇用機会均等法もないあの頃は、どの業界も似たような状況で、4年制大学の女子学生の就職はとても厳しいものだったのです。でも、慶應義塾女子高等学校(以下女子高)在学中に、「女性は自立すべし」と思い定め、その後公認会計士資格を取った私はこのような扱いに耐えられず、外資系に切り替えて就職しました。

もちろん、オフィスの公用語は英語、文書もすべて英文です。それなのに、私の英語の実力は、自身の入社歓迎会のお知らせ文書を理解するのにも四苦八苦するありさま。強い覚悟で英語を身につけるしかありません。日々の仕事を通じて

実践的に学ぶとともに、夜間の英語学校に通って猛勉強して、なんとか克服しました。この経験から言えるのは、たとえ英語が苦手でも、努力すればマスターできるということです。ただし、本気で学ぶ覚悟は必要です。

デロイトに、男女差別はまったくありませんでした。入社直後、ある女性の先輩から「機会は完全に均等だから、認められるためには周囲の人の2倍働けいだけよ」と言われたことを覚えています。

——その頃の仕事の内容について教えてください。

**後藤** 1983〜1993年の10年間で、海外でも日本企業が大いにもてはやされていた、まさに日本経済のバブル前後の時代です。私は米国証券取引委員会(SEC)に登録している日本企業を担当し、米国会計基準の財務諸表の監査を行っていました。

私はクライアントに密着して、年間10カ月は、まるでその会社に勤務しているかのように通いました。具体的には、クライアントの投資や企業買収などの新しいチャレンジ計画を、会計に落とし込んで検討するとどうなるかと、経理部の社員さんとあれこれ議論しながら一緒に考

えて、問題を一つひとつ潰していきます。若さゆえの好奇心とチャレンジ精神がなせる仕事ですが、この時期にがむしやらに仕事をしたことこそが、自分の将来につながったのだと思います。

——当時は、企業の国際化の動きが活発になり、米国会計基準の導入が本格化した時代でした。

**後藤** そもそも米国の会計基準は、アメリカ社会が時間をかけ、コンセンサスを得て出来上がったものです。それを、文化も組織もまったく異なる日本の企業が導入するわけですから、理解がたい点多々出てきます。企業幹部の方々に米国会計基準の説明をすると、「そんなのはおかしい」「納得できない」という声がお客から次にあがります。そのような声にお応えするには、「この基準を育てたアメリカの社会と企業のことをもっと知らなくては」と痛感し、自らアメリカ行きを希望して、ニューヨークに赴任しました。

その頃、日系の金融機関で起きたある事案をきっかけに、日系企業に対するアメリカ当局の目が極めて厳しくなっていました。そんな状況下で、アメリカに拠点を置く日本の金融機関を担当しました。会計監査は会計の数値を第三者の立場か

らチェックする仕事ですが、ニューヨークのデロイトではそれだけでなく、課題を解決するにはどうすればいいのかが、クライアントと一緒に考えて答えを見つけてるアドバイザーやコンサルティングの比重が大きくなっていました。

この傾向は、その後世界中で強まりましたが、この時点で、「サポートの面白さ」に目覚めたことが、結果として公認会計士としての仕事の幅を広げることになり、そのときに培った内外の人脉は、私の大きな財産になりました。

当初は4年の予定だった赴任は9年になりましたが、いま思えば、この経験が大きなターニングポイントでした。ニューヨークでの経験がなければ、デロイトのボードメンバーになることも、ありえませんでした。

## 大切にしているのは 「断らない」チャレンジ精神

——女子高から経済学部に進まれていますが、公認会計士になろうと思ったのはいつ頃ですか。

後藤 高校入学時は、『源氏物語』などが好きな夢見がちな文学少女でした。高校の授業で思い出すのは、リンボウ先生こ

と林望<sup>はやしのぞむ</sup>さんの古文の講義です。深い知識と斬新な視点での展開に引き込まれ、世の中にこんな面白い授業があるのかと思ったものです。林さんに限らず、女子高の先生方は専門分野の知識がとて深<sup>ふか</sup>く、教え方も独特で、内容の濃い魅力的な授業ばかりでした。

女子高の教育の根底には、福澤先生の「独立自尊」の教えがあります。自由と責任を自覚し、いかにして自立した女性になるかということが大きなテーマでした。同級生たちと、「結婚しても自立は保てるか」などと議論したことも懐かしい思い出です。

その自立の方法の一つが、国家資格を取ることであり、女子高の先生方との会話で公認会計士のことを知った私は、



女子高の修学旅行で行った中国地方にて

その資格を取得すべく経済学部に進みました。

ところが、目標を定めて大学に入ったものの、強い意志を持続させるのは、なかなか難しいものでした(笑)。まじめに勉強しようと思っていました。女子高からの友達はあるが、活動やサークルに参加してしまいました。結局、その寂しさに耐えられず、仲のよい友達が入っていたテニスサークルに1カ月遅れで入会しました。そして勉強はそこそこ、軽井沢へ合宿に行ったりと、青春を謳歌していました。

そのことに後悔はありません。夫はそのサークルで知り合った2年先輩です。アメリカへ行きたいと夫に相談したとき、彼は「外国暮らしも面白そうだな」と勧めていた会社を辞め、一緒にニューヨークへ来てくれました。このような柔軟な思考の持ち主を生み出した義塾の教育に感謝しています。

——公認会計士試験は合格率が低く、難関といわれますが、どのように受験勉強をされたのでしょうか？

後藤 3年生になって、そろそろ本気で勉強しなくてはと、



資格試験のための学校に通い始めました。大学の単位は、3年間でほぼ取ってしまった、4年生では受験勉強が主でした。卒業後も受験勉強に専念して合格まで2年かかりましたから、やはり簡単に取れる資格ではありませんね。

——経済学部で授業で印象に残っているものはありますか？

後藤 資格取得を目指す人には多いのですが、ゼミは取りませんでした。とはいえ授業はきちんと受けましたよ。必須科目の経済原論やマクロ経済学、統計学の講義を聞きながら、当時はこれが公認会計士としての将来の仕事に役立つとは、全然思いませんでした。しかし、今になって、あのときに学んだことが仕事の土台になっているのだと感じます。

トーマツでの私の担当分野は金融業界ですが、日々変化する金融マーケットや世界情勢をきちんと理解して自分の言葉で説明できなければ、クライアントに信頼されず、いい仕事はできません。土台をちゃんと作るという意味では、大学教育は本当に大切だとあらためて思います。

——塾生へのメッセージをお願いします。  
後藤 2012年のダボス会議に参加したとき、若い塾員が、社会起業家として

国際的に活躍していることを知り、頼もしくなりました。これからはますますグローバルな視点を身につけて、広い視野で新しいことにチャレンジすることが重要になると思います。日本の、ひいては世界の未来を担う人が出てくることを期待しています。会議では清家塾長にもお会いできたんですよ。

近頃、さまざまな分野において女性の活躍が話題になっています。ある方が、「慶應出身の女性はクレバーだから、風当たりの強い一番にはならず何事も二番手に控えている」と評されたことがありました。本当でしょうか？

私は二番では仕事でも何でも、本当の



軽井沢でのサークル夏合宿

面白さはわからないと思います。先頭に立つことは、確かに大変ではありますが、その立ち位置でこそ得るものは大きく、人生をより面白くしてくれるはずです。控えるのではなく、積極的にチャレンジすることを期待します。

その一歩として、塾生、特に女性の皆さんには「断らない」ことを勧めます。「断らない」は私の Motto でもあります。これまでの仕事を振り返ってみると、未熟ながらも懸命に仕事に取り組んでいる私のことを面白がって、新しいことをやってみないかと言ってくれる人がいました。

たとえハードルが高そうに思えても、私はその提案を断ったことがありません。その積み重ねが、約20万人が働いているドロイトグループで、32名のボードメンバーの一人に選ばれることにつながっています。責任の重い仕事ですが、きっと新しい何かが得られると信じています。公認会計士三田会の会長をやってみませんかとお声がけいただき、2013年3月からは女性初の会長職を務めています。会員同士が会計事務所の垣根を越えて交流し、刺激し合うことで、また何か面白いことが見えてくるはずですよ。

——本日はありがとうございました。